

## 人間はなぜ争うのか

本年の全戦没者追弔法会は、慶讃法要を勝縁としてお勤めします。「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」という慶讃テーマから、この法会を考えると、この世に生をうけ、共に尊いいのちを生きながらも、そのいのちを互いに奪い合う戦争の歴史が思い起こされます。

私たちは、先の侵略戦争によって、アジア・太平洋地域で数千万の人たちに惨害をもたらしました。大谷派宗門においても、仏法の名のもとに多くの人間を戦場へと送りだし、戦没者をはじめ、残された遺族にも、計り知れない苦痛と悲しみを強いてきました。戦没者とは、日本の軍人、軍属の人ばかりではありません。敵味方を超えて戦争でいのちを落とした全ての人たち一人ひとりと向き合おうという願いが、この全戦没者の「全」に込められています。

現在、ロシア連邦によるウクライナ侵攻をはじめ、世界の各地で戦争（紛争）が発生し、多くの住民が苦難といのちの危機に瀕しています。日本周辺においても、弾道ミサイルなどの発射や、領海への侵入が相次いで起きています。このような状況のなか、日本国内では先人たちが大切に守ってきた「戦争をしない、軍隊を持たない」（日本国憲法第九条）という誇るべき理念が揺らぎ、自衛という正義を掲げ、武力をもって反撃すべき（反撃能力〈敵基地攻撃能力〉の保有）という世論が形成されつつあります。

平和を求めながら、人間はなぜ争うのでしょうか。平和を求めるといっても、そこには、自らを守ろうとする心から作り出される排他性が隠れているのです。それが他者との分断を生み、とどまることのない争いとなり、多大な被害を生み出しつづけるのです。

私たち宗門は、1995（平成7）年に「賜った信心の智慧をもって、宗門が犯した罪責を検証し、これらの惨事を未然に防止する努力を惜しまない」（「不戦決議」）という誓いを表明しました。すべての戦没者、そして遺族が被った悲しみの歴史に学び、このような激動の時代に振り回されることなく立ち止まることが求められているのではないのでしょうか。

親鸞聖人は、「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」とお手紙のなかで述べておられます。さまざまな争乱による多くの民衆の苦しみを悲しまれた宗祖の言葉から、私たちは戦争の無残さ、それを生み出す人間の深い闇を心に刻みたいと思います。この法会をとおして、すべての武力行使に対して反対の意を表するとともに、他者との分断を超えた平和が訪れることを願います。